

# がんの「治療費」に どう備えるか

古川 悦子  
フェリススライフ代表  
ファイナンシャル・プランナー



がん治療は日々進化を続け、治療は長期化・高額化している。がんの治療費に備えるには、まずは家計の見直しをし、そのうえで金融商品を活用したい。本稿では、備え方のポイントを解説する。

## 1 治療費に備える 場合の 基本的な考え方

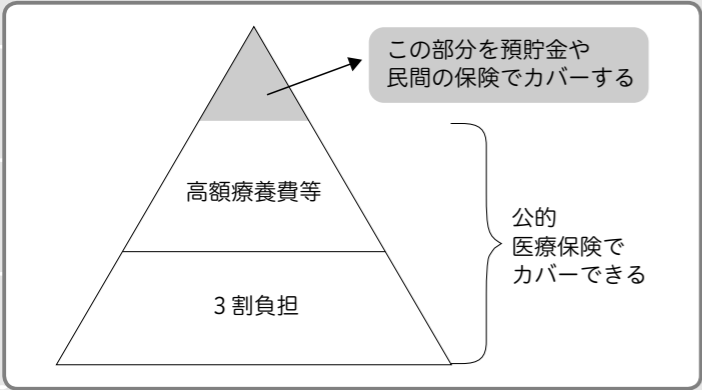
がんの治療費に備える場合は、公的医療保険を基本として、不足する分を準備する、と考えるとよい（図表1）。

治療が長期間に及ぶなどで治療費が高額になる場合は、高額療養費制度が適用される。ただし、入院時の差額ベッド代、先進医療の技術料と未承認の抗がん剤治療など、公的医療保険が適用されない

だ。きっかけも人によって異なり、前述のキャッシュフロー表を通して気づいた内容も皆同じではないだろう。一方、保険商品の保障内容も多様化している。

がんの治療費に備える保険という点、がん保険が思い浮かぶが、ほかの保険を活用することもできる。どの保険種類を選ぶかを考える

図表1 がんの治療費に備える範囲



※勤務先が健康保険組合の場合、組合独自の付加給付により低い負担額の設定をしているところもある。自治体によっては、医療費助成制度（ひとり親家庭等医療費助成制度・がん患者へのウイッグ（かつら）購入費用助成制度など）がある。

図表2 医療費控除額(最高200万円)の計算式

$$\begin{aligned} & \text{「1年間（1月～12月）に支払った医療費の総額」} \\ & - \text{「保険金などで補てんされる金額」} \\ & \quad \text{（高額療養費や保険会社で支払われる給付金・保険金）} \\ & - 10万円^* \end{aligned}$$

※所得の合計額が200万円までの場合は所得の合計額の5%  
※医療費控除の対象に含まれない費用など詳細については最寄りの税務署に問い合わせること。

がん治療もある。また、通院時の交通費など治療費以外の費用もかかる。これらの費用は、公的医療保険適用の治療費と合わせて医療費控除の対象となり、確定申告することで所得税・住民税が軽減される（図表2）。

がん治療は入院の短期化に伴い通院にシフトしている。1回の通院治療の自己負担額は、数千円から先進医療の技術料300万円前後と幅広い。ただ、治療は複数回実施され、治療方法も手術、放射線、抗がん剤などの組合せにより

るときに大事なものは、各保険種類の支払事由（どのようなときに支払われるのか）を押さえることだ（図表3）。まずは違いを理解することが必要となる。

保障対象や給付金の種類など各商品の相違点を押さえる  
次に、保険種類ごとに各商品の

多様化し、さらに、がんが罹患した部位や進行度により異なる。がん治療の技術は日々進化し続けている。そんな中、健康な人の長期的ながんの治療費自己負担額を予測するのは困難だ。がんにどの時期に罹患するのか、どの部位に罹患するのかはわからない。あるいは罹患しないかもしれない。

まずは家計を見直すことから始めてみる  
治療費に備えるため、生活費を圧迫するようでは本末転倒だ。将来に向かって、ほかに備えるべき

保障内容（給付金等の金額、保険料など）と、取扱内容（保険期間、保険料払込期間など）を確認しよう。商品数が多いがん保険、医療保険、三大疾病保障保険の、最近の商品の保障内容は押さえておきたい。

がん保険、医療保険、三大疾病保障保険の大きな違いは、保障対象の範囲。がん保険はがんに限定して保障、医療保険はがんを含めた病気やケガを保障、三大疾病保障保険は特定の病気（がん・急性心筋梗塞・脳卒中）に限定して保障する。

特に、がん保険と医療保険は給付金等の種類が多いので、保障内容の相違点を押さえておきたい（図表4）。また、セカンドオピニオンなどの付帯サービスを充実させる商品も増えている。

### 1 がん保険（特約） 商品を選ぶ際に 確認すべきポイントとは？

医療環境の変化にあわせて保障

費用もある。これを機に、キャッシュフロー表やライフイベント表、金融一覧表（配偶者や勤務先が契約している保険契約を含む）などを作成し、家計の現状把握と将来の家計の推移を把握するとよいだろう。無駄を削ることで治療費に回せる費用や、治療費に充当できる金融商品（預貯金や投資信託の配当金など）に気づかされる。

そして、新たに金融商品を活用して治療費に備える場合は、各金融商品の特徴を押さえておくことが必要だ。一般的に、預貯金は幅広い用途に適用することができて、民間の保険は保障が開始されると保険期間内であれば、いつ起こるかかわらないリスクに対応できる。

## 2 治療費に備える 保険商品の概要と 選び方

がんの治療費に備えるための保険を選ぶ基準はケースバイケース

内容を改定した商品が発売されている。実費の保障やがん免疫細胞療法（公的医療保険適用外）の治療費を保障するなど特徴的ながん保険もある。

ちなみに、各商品の約款には、「がん」と「診断確定」の定義が規定されている。商品により若干異なるので見ておきたい。

### ● 主要約

診断給付金や、通院、手術、放射線治療、抗がん剤治療、ホルモン剤治療などを受けるとそれぞれ給付金等が支払われるが、商品により主契約となる給付金は異なる。複数の給付金が主契約となる商品も多い。

商品を選ぶときは、必要ながん保障は何か、特に必要とするがん治療の保障があるかを考えることが大切だ。ちなみに、診断給付金は幅広い用途に適用できる。

### ● 特約

付加できる特約、特約の解約や中途付加、減額の取扱いの可否（保障ニーズの変化に対応）を確認す